「システマティックな小説制作をめざして」
参加者：Rain 坊、常磐、日居

Rain 坊: こんばんは。
日居月諸: こんばんは。
常磐 誠:こんばんは！ それでは始めて行きましょうか。
Rain 坊: 了解です！
常磐 誠: タイトルは、「システマティックな小説制作をめざして」でしたよね。
日居月諸: そうでしたね。
常磐 誠: 最初のテーマは前回と一緒で大丈夫でしょう。
常磐 誠: **・まどマギなどのアニメから見る制作について**
常磐 誠: えーっと、私は一通りしか実は見ていないんですけれども、お二人はどうでしょうか？
Rain 坊: うーん、しっかりとは見てないですね。話の流れは知っている程度です。
日居月諸: リアルタイムで放送された分だけですね。つまり全話通して一回みたきり。
常磐 誠: 私は DVD でした。大体皆様変わらない感じで。いい感じですね。それでその作品を中心にアングラがどうこうとか語って行く訳です。さて、例えばこの作品を切ろうと思えば、どこまででも切り口はあると思うのですが、この作品は売り上げでヒットチャートに名前を出してきたり、ローソンのキャンペーンが組まれるなど、所謂表社会への露出が多い作品かと思います。以前はおたく向け、というような印象を抱かれることの多かったこういう作品が露出してきたことにたいして何か思うことなどありますか？
日居月諸: 思うところと言いますか、エヴァとかけいおん！でもいいんですけど、「オタク向け」と呼ばれる物でも人気になる以上はエンターテイメントとしての要素は多分に含まれているわけです。だから、特に不思議には思わなかったです。「一般」の人たちの琴線に触れさえすれば、なんでも売れるんだな、と思ったくらいで。
常磐 誠: ほうほう。琴線に触れるエンタメならば当然に売れる、受ける、ということですね。ありがとうございます。Rain 坊さんはいかがですか？
Rain 坊: オタク向けという考えもありますが、絵柄や設定的（魔法少女）ということから言えば子供向けもいけたわけですよ。実際、そう思ってアニメを見た人もいるみたいですし。ただ、話の内容的に小っちゃい子供向けではなかったのがなんともいえないところで、ちょっと面白い現象だなと思いました。
常磐 誠: ありがとうございます。まどマギの絵柄については思い切り狙いがあった、ということもあってそれも切り口の一つですね。シナリオに虚淵玄氏の名前があった時点でモロバレだった、なんていう声もありますがｗ　でもそれについてはまた後で。アングラ＝オタク、という感じではない、という感覚をお二方は持っていらっしゃるように感じられ

ましたが、これについてはいかがでしょうか？
日居月諸: 個人的な感覚としては、アングラ≠オタクなんです。オタクっていうと、最近ではアニメオタクを意味するようになりましたけど、放送される限りはやっぱり地下に眠っているものじゃない。アングラはもっとエグイもの、っていうイメージがあります。
Rain 坊: エグイとは？
日居月諸: なんというか・・・ エログロナンセンスっていうわかりやすい言葉がありますが、ウケないことも承知の上で作っているものこそアングラ、っていう観念があるんですね。アニメの場合は、世間からは多少ズレてるかもしれないけど、固定客（アニメオタク）相手にはウケると想定してやっている。
常磐 誠: わっかりやすいところでいうと浅野いにお、なんかそうでしょうか？ 私の中のイメージ。
日居月諸: そのへんが、エグイ、っていう感じでしょうか
Rain 坊: なるほど。確かにウケは狙っていますね。
常磐 誠: この固定客は一般とはズレたところにいる、と日居さんは考えている訳ですね？
日居月諸: そうですね。ただ、さっきも触れたことですけど、エンターテイメントというものでつながっている以上、固定客と一般の隔たりはそんなに深くはないと思います。
常磐 誠: 今自分が抱いた問題（固定客＝アングラ、か？）、疑問が日居さんの発言で解決しました。ありがとうございます。エンタメというところで繋がっているからこそ、固定客（便宜上オタクとしても良いでしょうか？）にも一般層にも受けて盛り上がって行くことがある。まどマギはその典型。日居さんの感覚でいくとこんな感じにまとまりますかね。ちなみに日居さん。日居さんなりの、で OK なので、固定客に受けて、一般には受けていない。そんなアニメってあったりしますか？ アニメにこだわらず、小説とかでも良いので。
常磐 誠: （常磐は、文学がまさしくそれに当たっちゃうような気がしてなりません……）
日居月諸: （そりゃ否めんところですわ・・・ w）
常磐 誠: （ちょっと今日はそこも話したいです）
日居月諸: どうだろうな・・・ 私がアニメを見はじめたのは 2、3 年前、Youtube や二コ二コ動画が市民権を得たころなので、今まで見てきたもので一般には受けないものはないと思います（結果は別として）
Rain 坊: 最近では一般層が固定客化しているような気がします。
常磐 誠: もう少し詳しく話せますか？
Rain 坊: ええっと、世代的にアニメを見ていた人たちが大人になっているというのも理由の一つですが、完全子供向けアニメというものは少なくなり、大人向けが多くなりつつある気がします。比較的、昔よりは漫画やアニメを見やすい環境ができあがりつつあると思います。

常磐 誠: なるほど！ 下地、環境ができてきているわけですね。そうしたら、ちょっとそれに関連して……。
常磐 誠: ・ 宮崎勤関連の、『ここに１万人の宮崎勤が並んでいます！』
常磐 誠: まだ、そういう下地ができる前、私たちが幼かった（というか常磐が産まれた年あたりですｗ）1988、1989 年の事件についてはどうでしょうか？
もうすでに風化しているとも言えるのでしょうか。
当事、二次元だったり、幼女性愛、グロという文化（？）に対する風当たりは厳しかったでしょうね。
この事件を契機に、より偏見は強まったように思います。
常磐 誠: まさしくエログロナンセンスという言葉にもあるように、アングラがこういう世界を照らす作品だと定義すれば、コミケみたいなカオスな場所、そこで売られるコンテンツやアイテムは、まさしく固定客のみがターゲットだったでしょう。そこまで強烈な印象を一度は持たれてしまったこれらのコンテンツが今また社会において市民権を得てきているのには何か理由があるのでしょうか？
日居月諸: 非常にざっくりとした意見にはなりますけど、やっぱり偏見がうすれてるだけじゃないのかな、と思いますね。
Rain 坊: そうですね。
常磐 誠: ありがとうございます。実はこれ違う見方をする人がいまして、その方は『ネット環境の普及』を理由に挙げていました。
日居月諸: ああ、なるほど。悪い言い方にはなりますけど、ネットは嫌でも多様な情報に触れられますしね。
常磐 誠: ざっくりした話になってしまいますが、やはりこの二つが大きな理由になっていると思います。あとは、まぁ精々環境が整ったことにより、理論的な考え方（オタクが危険なのではなく、行動に移すその人こそが危険）が広まったこともあるかな。でもこれはもう日居さんがおっしゃっている。
Rain 坊: ローカルだとそもそも放送されなかったりもして、触れ合う機会そのものがなかったりしますよね。
常磐 誠: Rain 坊さん。えと、触れ合う機会というと、何と触れ合う機会ですかね？
Rain 坊: アニメです、この場合は。地方だと見ることができないことがあるんですよ、見たくても。
日居月諸: うん、おなじく地方出身だからよくわかるｗ
常磐 誠: 同じく地方出（ry
さて、では触れ合う機会がないことによって何が起こるのでしょうか。
Rain 坊: 知らない、分からない、理解できないものは基本的に否定的になると思います。
日居月諸: それこそアングラ化が起こる？

常磐 誠: Rain 坊さん。まさしく同意見です。人間が忌避反応を起こすのって、実は『よく知らない』だけだったりするんですよね。だからこそ、ネット環境普及（DVD とかが安価で手に入りやすい流れの構築）→知ることができる。→良さがわかる。
という流れで今の世の中がきているような気がします。
日居月諸: なるほど。
常磐 誠: 日居さん。それもその通りだと思います。
広まってきたとはいえ、まだまだ嫌悪感、忌避反応はあります。そして周囲（一般層）に『知りたい』という気持ちを起こすだけの二ーズが起こらなければ、必然的に作品やその周囲は引き籠っていく（＝アングラ化）方向に流れてしまいますよね。
日居月諸: 世間に対する反発を力にしてさらに籠っていく、という場合もあるかもしれません。嫌悪されて否定されると、自己防衛としてどうせ俺らはアングラよ、というような居直りをすることがある。そして世間に対する訴求を忘れて・・・ といった具合に。
常磐 誠: なるほどですね。ありがとうございます。では、話をそろそろ小説にもっていきましょう。私たちのメインフィールド、土俵です。
常磐 誠: **・ 小説とアニメの違い。**
常磐 誠: 単純にここを語るのも良いかと思います。ただし、これだけだと内容が広く浅くになっちゃうので、『集団作業か、個人作業か』という点に絞って話していきましょう。かなり上の方になりますが、まどマギは作品の CM の段階で、イラストレーター、シナリオライター、それとあともう一人の名前がかなり目立つようにデカデカと登場します。異空間の表現は劇団イヌカレー。ここも有名ですね。そして、この段階でもうこの作品は集団の作品、ということになります。一方、小説は常に内向的に語ることになります。内に、内に、内に。まるで孤独な闘い。根本的に、これで良いのか？ という提起から。お二方もどうぞお語りください。
日居月諸: 議題をハナからひっくり返すようで悪いんですけど、私は小説は一人で書くものではない、と考えてるんです。もちろん物理的な共同作業だとか、そういう意味ではなくて、精神的な意味で。
常磐 誠: めっちゃ面白い意見でましたね。ありがとうございます。少しだけ具体的に語っていただけますか？
日居月諸: だから、内向的な闘い、という前提にはいまいちピンとこないんですね。語られるところはわかるけど、自分には引きつけられない。
Rain 坊: 個人『的』な作業だとは思いますが、完全に個人だけとは思いません。作品を書くにあたって取材をしたり、資料を読んだり、色々したり等々。刺激を外部から得ていると思います。完全に自分だけの力で作品を作っていると思っている人の作品は自分勝手、自己満足なものなのではないかなと思います。
日居月諸: そう、刺激を外部から受けている。

Rain 坊: けど、小説は刺激を受けてあくまで個人で書くものだからいいですが（それはそれで苦労はもちろんありますが）、ほんとの集団作業のアニメは大変そうだと思います。様々な人との意思疎通とか。
常磐 誠: 皆で同じような絵を描き続けるとか常磐は発狂します。
日居月諸: そういう点では結構アニメの方が集中的なのかもしれませんね。実は小説の方が拡散的なのかもしれない。アニメの場合は皆で同じヴィジョンをみなければならないわけです。多少の意見の相違はあっても。ただ、小説家は自分の中に映るヴィジョンさえみればいい。もちろん皆さん経験があるからわかると思いますが、このヴィジョンを捉えるのが中々難しい。あっちこっちに動いたり、映る姿が変わったりする。それをどうにか束ねようとする作家もいるでしょうが、大抵は色々な面相を並べている小説のほうが多いんじゃないかと思います。
常磐 誠: 一つの形を作り上げる上で、の違いですね。集中的、を収束的、と言い換えても良いですか？
日居月諸: ですね。> 収束的
それから、しちめんどくさい話にはなりますけど、自分というのも「自らの領分」と書くからには、社会や世界にちらばっている要素をかき集めた末に成り立っている者だったりする。要するに、他人の上に自分が成り立っている。そうしてみると、外面的には自分と向き合う作業が、実は他人と向き合う作業だったりするかもしれなくなってくる。小説の可能性もそこから押し広げられるんじゃないかな、とは思っています。
常磐 誠: 心理学や哲学なんかでも、自分を認知する上で（するのは自分でも）、やっぱり相手がいないと理解できない自分はあると教わります。まさに誰かがいて、自分がいる。何かがあって、自分がいるんですよね。
けれども常磐はどのようにして『そこから押し広げられる』かがわかりません。日居さん、語れますか？
日居月諸: 自分と向き合うことは他人と向き合うこと、それが第一前提だとします。他人というのにも色々とあります。身近な人々、知らない人々、もっと言えば、死者という過去の人々も含まれる
常磐 誠: はい。
日居月諸: 自分のことは知っていて当然なわけです。ただ、知っていて当然だとおもっていた者と向き合ってみると、自分を支えている者（他人）につながっていって、そこを押し進めていくと、なぜか自分とは似ても似つかないものが浮かび上がってくる、そんな瞬間がやってくるんじゃないかと考えているんです。知っていることから、知らなかったはずのことへとつながっていく。「自らの領分」を保ったまま、自らの領分じゃないところへ知らず知らずうつっていく、といった感じでしょうか。一見内向的な作業である小説のイメージを払拭できる可能性があるとしたら、実はそこなんじゃないかと思うんです。内

向が、いつしか外向的なものへ変わっていく、といったような。
常磐 誠: 自分から始まり、自分じゃないところにいつの間にか移っている。
日居月諸: うんうん。
常磐 誠: 内への工ネルギーは、その時点で外に向かって行く。わかりやすいです。ありがとうございます。日居さん。ありがとうございます。Rain 坊さん、 何か意見はありますか？
Rain 坊: 実際にはどうすればいいんですかね？　日居さんの意見としては精神的な面かなと思うのですが、行動的な面からいったらどんなことをすればいいんですかね？
常磐 誠: それがまさしく最後のテーマ！
常磐 誠: **・システマティックな小説制作をめざして！**
日居月諸: 行動面か・・・。
Rain 坊: 少し思ったんですが二次創作って結構それっぽくないですか？
Rain 坊: 同じ世界観を共有しつつ、個人的なさぎょうもありつつ。ちがうかな？
日居月諸: ふむふむ。
常磐 誠: んー。一面としてあるとは思うのです。ただ、それを Twitter 文芸部の皆に結論として出した時に、納得できるだろうか？ と考えると、何かがズレている気がしちゃいます。
Rain 坊: 単に、作業を分担すればいいってもんでもないですよね・・・。
常磐 誠: それはまさしく最初に常磐が思っていたことですね。
日居月諸: でもどうかな、二次創作は他人→自分というフィードバックだと思います。他人の作品から、自分を発見していく。読書にも関係することですが。
常磐 誠: システマティック＝体系的、系統的、という意味ですよね。そこに拘りすぎる必要はないですよ。
日居月諸: 技術論として、具体的に、といったところでしょうかね。
Rain 坊: リレー小説もちょっと違うのかな。
常磐 誠: あくまで、今主題に置いているのは、……日居さんに先越されました。内向的な工ネルギーを外側に、というのを実際にどういう風に実行してゆくか、です。かつて、実現はしませんでしたがリレー小説は文芸部内で話題に上りましたよー。
Rain 坊: 書いた作品を発表することそれ自体が内向的な工ネルギーを外側にって気がしてきました……。
日居月諸: うん、同じくそう思わざるを得ないんです。
常磐 誠: じゃあ、どう書きましょうか？
確かに、その通りだと思います。もっと具体的にいい形が浮かべばそれをまた第二回として起こしてその場で発表しても良いですよね。
日居月諸: 非常に身も蓋もない言い方をしますが、私は何も決めないで書くということを

よくやります。プロットも登場人物もなにもなく。何か書きたいシーンがぱっと浮んだら、そこから書いちゃう。行くあてもなく
常磐 誠: ただ、一先ず私達は（結構日居さんの言葉に頼り過ぎてるきらいはありますが）、一つの、『あ、良さそうだな』という共通認識を得ているので、もっとそこに拘って書いてみても良いのでは？
常磐 誠: （日居さん常磐とナカーマｗ）
常磐 誠: （というか私はエンタメ畑で、キャラが結構勝手に話を進めてくれたりもするんですよねー。）
日居月諸: （対談の企画意図自体をうっちゃる言い方をしちゃうと、方法とか考えないんですよ、いつもｗ手の内に何にもない状態で始めることが多い、だからこういう場で語れることがなにもなかったりするｗ）
日居月諸: （ただひたすら、こういうところにいけばいいな、っていう精神的なものだけをあてにして書いてる）
常磐 誠: （見事なうっちゃり！ でもいい感じだと思いますｗ 後半についても本当に常磐とナカーマwww）
Rain 坊: なら、外側への発信の方法は変えずに内側のエネルギーの質を変えてみることを検討してみてはどうですか？　縛りを決めて書くとかの特殊な環境下で書いたものを発表とか。
常磐 誠: うんうん。実際に縛りとして有形化させても良いですし、常磐としては、常磐自身を考えてみたり、登場人物（主人公とか）について突き詰めて考えてみる。その中で見えてきたものを表現できるように頑張る、みたいな無形な努力でもいいと思うのです。
日居月諸: 登場人物について一生懸命考えている内に、いままで自分では書けなかったものが出てくるということはありますね。登場人物に作者がなりきっちゃう。そうしたら日居さんはそれを外に向けて宣言してみたりするのはどうでしょうかね？
日居月諸: と、いうと？＞常磐さん
日居月諸: まあ、さっき話したことですけど、知らないはずの人物を書いているうちに、自分の知らない面が見えてくる、ということはあると思います。小説を書いている内に、自分さがしをしている
常磐 誠: 実際にするかどうかは別として、ですが、どのような作品が書きたいのか、という書き手としてのスタンスを日居さんは表明されてないような気がするので、それをどこかに明記する。自分の机とかでも良いですし、それこそ Twitter のプロフィールでも。どこでも良いので。できれば他人から見える方が宣言としては良いんですけど、それは好き好きで。
日居月諸: なるほど。そうか、twi 文に入ってから小説書いてないものな･･･ ｗ
常磐 誠: つまり、自分を見つめて作品を書く、という方法もあれば、作品の中に自分がい

る、という感覚を探すのも良いのではないでしょうか？
日居月諸: うんうん。
常磐 誠: 青い『自分探し』と言われればそれまでかもしれませんが、ここ、一応若手の集まりなので（笑）
これ、一つの結論にできそうですが、いかがでしょうか？
日居月諸: 特に異存はないです。
Rain 坊: 同じく。
常磐 誠: では、具体的な方法論はまた各自で考えたり、気づいたりしていきながら、共有して行きましょう！本当に有意義でした。そろそろ御開きでしょうか。それでは、Rain 坊さん、日居さん、本日は本当に有意義な時間をありがとうございました!!
Rain 坊: お疲れ様でした。緊急参戦の日居さんには感謝感謝です。
常磐 誠: 本当に感謝であります。
日居月諸: いえいえ。好きでやっていることですから。お疲れさまでした。
Rain 坊: おつかさまでした。